

## 村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』

——高い壁と卵——

太田 鈴子

### 1 ノボルは高い壁、クミコは卵

『ねじまき鳥クロニクル』<sup>(1)</sup>は、「ねじまき鳥」という、なんともかわい鳥の名から、アンデルセン童話「ナイチンゲール」を思い出させる。飛び去ってしまったナイチンゲールの代わりに、宝石で飾られたねじを巻くと美しい声で鳴くナイチンゲールが王様にプレゼントされるのだ。しかし、おもちゃのナイチンゲールのねじが壊れ、本当のナイチンゲールの声こそが、真に心を癒すことに気づくのである。『ねじまき鳥クロニクル』のねじまき鳥も、その声を聞く者の心をとらえる。しかし、権力者を癒やすために鳴くのではなく、そのねじは世界のねじを巻くねじであり、一人の間を動かす声であると同時に、世界を動かす声なのだ。ねじまき鳥の声は、一日の始まりであり、人を勇気づける声なのである。ねじを巻くような「ギイイイイイ、ギイイイイイ」という声だという。

『ねじまき鳥クロニクル』は、トオルが、FM放送から流れるロッシーニの『泥棒かささぎ』序曲に合わせて口笛を吹きながら、スパゲティをゆでているところから話しが始まる。『ダンス・ダンス・ダンス』のハム(2)のスパゲティを作る場面を思い出す。ビールを呑みながら、ありあわせ

の簡単な材料で作るスパゲティがとてもおいしそうで、作ってみようと思わせた、そんな過去の作品から受けた楽しい記憶が蘇り、物語の序章から、これからの物語に大きな期待を持たせるのだ。

ただし第1部の小題にもなっている『泥棒かささぎ』は、それほどポピュラーなオペラではないのではないか。藤原歌劇団の日本初演は2008年というから、村上春樹の『ねじまき鳥クロニクル』に背中を押された上演と思われる。もちろん、序曲だけが演奏されることは、オペラが全曲上演されることより、かなり多いだろうが、どのくらい知られている曲なのだろうか。そうした疑問にもかかわらず、クラウディオ・アバド指揮の「泥棒かささぎ序曲」が、作品の冒頭に鳴り響くと、かなりリアリティを感じさせ、読者も共にうきうきと、スパゲティのゆであがりを待つことになる。聞いてみるとこの曲は、行進曲のリズムで始まり、小太鼓も入ってなかなか軽快だ。ちょうど、オペラの幕開きの気分である。序曲の演奏により気分が徐々に劇場空間に溶け込んでいき、ワクワクとして待つ、あの時間のような期待感を持たせるのだ。「泥棒かささぎ」が、この長い作品の序曲に選ばれたのは、愛し合う二人の間に入り込む障害が作品のテーマ(4)になっているからである。

トオルは三十歳になり、法律事務所での仕事を辞めて二カ月、朝十時半、奇妙な女からのボルノ・テープのような電話も、妻クミコからの猫探しの電話も、「泥棒かささぎ」序曲を口笛で吹きながら猫を探して路地に入り込むのも、笠原メイとの路地での出会いも、物語の始まりは、何もすることのない男の暇つぶしのような印象を与える。トオルは、母親のわずかな遺産を相続し、叔父が安価で貸してくれた家に住み、日常的には、妻の収入で暮らしていた。少々わがままなクミコをトオルは怒らせないように、決定的なことを言わせないよう気を配りつつ、機嫌がよいクミコを見るのを喜びとしている。

第一部には、「普通の人」の幸せな生活が描かれる。しかしクミコの兄、ノボルを憎んでいるというトオルの告白で、物語は、人の尊厳を汚す暴力の物語へと大きくカーブを切る。トオルはこう宣言した。

オーケー、正直に認めよう、おそろく僕は綿谷ノボルを憎んでいるのだ。(第一部 6 p177)

綿谷ノボルは、クミコより九歳年上で三十七歳。トオルの説明によれば父親の教育を素直に享受した、ハラスメント男である。

ノボルの父親は、新潟県の農家に次男として生まれ、奨学金をもらって東京大学を優秀な成績で卒業し、現在運輸省の官僚である。父親の長兄は、新潟の選挙区から衆議院議員に選出され四期か五期つとめている。「ひどくプライドが高く、独善的だった。命令することに馴れ、自分の属している世界の価値観をみじんも疑うところがなかった。彼にとってはヒエラルキーがすべてだった。自分より上の権威にはかんとんにかしこまったが、下のものを踏みつけることに対してはいささかの躊躇も感じなかった。」

という。父親はノボルを溺愛し、「日本という社会の中でまっとうな生活を送るためには少しでも優秀な成績を取って、一人でも多くの人間を押しつけていくしかないという信念」を持ち、「人間が平等であるというのは、学校で建前として教えられるだけのことであって、そんなものはただの寝言だ。日本という国は構造的には民主国家ではあるけれど、同時にそれは熾烈な弱肉強食の階級社会であり、エリートにならなければ、この国で生きていく意味などほとんど何もない。ただただひきうすの中でゆっくりとすりつぶされていくだけだ。だから人は一段でも上の梯子に上ろうとする。それはきわめて健全な欲望なのだ。人々がもしその欲望をなくしてしまつたなら、この国は滅びるしかないだろう。」「狭い場所で一番を取れないような人間が、どうしてもっと広い世界で一番を取れるのだ」と考える男である。その父親の意向通り、ノボルは、優秀な私立高校から東大経済学部を優等に近い成績で卒業し、イェール大学大学院に二年間留学、さらに東大の大学院に戻り、大学に残って学者の道を選んだ。すでに一冊経済学書を出版して有名になり、雑誌に評論を書きテレビに出演してコメンテーターをこなし、レギュラー番組も持つようになっている。

トオルは、クミコの父親と口論の末関係を絶ってしまったが、父親には腹が立たないという。しかしノボルには、憎しみを抱く。

トオルは、クミコと結婚する前、初めてノボルに会った時から、ノボルに排除された。二人の結婚に興味はないので、結婚の理由や夢などを聞くつもりはない。そのようなことで、個人的な時間を奪われたくないとノボルは、トオルに向かって言ったのである。その時、トオルは感じた。

まるですえた臭いを放つ異物が少しずつ腹の底にたまっていくような気分だ

った。彼の言動の何かが僕を刺激したわけではない。僕が嫌だったのは綿谷ノボルという人間の顔そのものだった。僕がそのときに直観的に感じたのは、この男の顔は何か別のものに覆われているということだった。そこには何か間違ったものがある。これは本当の彼の顔ではない。僕はそう感じたのだ。

(第一部6 p171)

トオルは、他人の存在を自分自身と別な領域に属するものとして区別し、不愉快な他人に出会っても感情を凍結してかき乱されないようなことのできる能力を持っていると自負していたのだが、ノボルを「関係ない領域」に押しやることができず、かえってノボルがトオルを「関係ないという領域」に押しやった。トオルは自分より有能な人間としてノボルを意識するが、結婚後六年を経てなお、存在をないものとみなされ、憎悪が噴出したのである。

『ねじまき鳥クロニクル』では、トオルの告白と詳細な説明によりノボルは悪役のイメージを持たされる。ノボルの優れた面も紹介されるが、善い面は、語られない。ノボルの著書もマスコミや大衆からの人気も、トオルによって偽物だと断定される。そして、この長い物語の大団円は、ノボルへの憎悪を告白し、妻をその兄に取られそうになったトオルではなく、女性であり、妹であるクミコが、兄ノボルを殺害する場面である。『ねじまき鳥クロニクル』は、物語への期待感を感じさせる序曲、登場人物の容姿や生活態度に特徴があり、現実には現れたら注目を浴びるおもしろい人物が登場しながら、憎悪に満ちた展開になっていく物語なのである。クミコは手紙で殺人を告白する。なぜ、殺したのか。ノボルへの憎悪を、早い内から告白していたトオルが手を下さず、なぜクミコだったのか。ク

ミコは、トオル以上にノボルを憎悪していたのだろうか。

『ねじまき鳥クロニクル』は、「悪」の存在が明確に認識されている物語である。

村上春樹は、エルサレム賞受賞スピーチで「高く堅牢な壁と、そこにぶつかれば壊れてしまう卵があるなら、私は常に卵の側に立とう」と語った。そのスピーチでは、「私が小説を書く理由はたった一つ、個々の魂の尊厳を浮き彫りにし、そこに光を当てることです。物語の目的とは、体制が私たちの魂をわなにかけて、卑しめることがないよう、警報を発したり、体制に光を向けたりしておくことです。」<sup>(5)</sup>と、小説を書く目的を明確に述べている。『ねじまき鳥クロニクル』は、このエルサレムのスピーチで述べた目的にそったものである。すなわち、ノボルが「壁(体制)」の側であり、クミコが「卵」の関係となる。長い物語だが、この関係を念頭に読むと理解しやすい。

## 2 ねじまき鳥の側に立つ人々

ねじまき鳥の声を聴いて日々をおくる者と、自ら世界のねじを巻き自分の権力欲を満たそうとする者と、クロニクルは二項対立の構造である。

ねじまき鳥の声を聴くことのできるのは、その鳥を、ねじまき鳥と名づけたトオルとクミコ、赤坂シナモン、そして二十歳をすぎたばかりの若い兵隊である。トオルは、朝起きた時、精神的に疲れた時、<sup>(6)</sup>その声を聞く。ねじまき鳥の声は、再び活動するための原動力となっているのだ。<sup>(7)</sup>

ねじまき鳥の声に励まされ、トオルとクミコは、それぞれの役割を果たしつつ、六年間平穏に生活してきた。夫トオルにとっては何の前ぶれもなく、クミコが家に帰ってこなくなり、クミコからの手紙で、つきあってい

る男の存在を知る。トオルはクミコとの離婚を考えるのである。クミコの収入をあてにして、法律事務所を二カ月前に辞めていたトオルの人生は、予想もしていなかった離婚の危機に見舞われると同時に、収入の拠り所を失うという大きなダメージを受ける。トオルは、クミコが失踪した当初は腹を立てることもなく、あわてることもなく、茫然としているばかりであるが、やがて身边には様々の異変が起り、自身も消耗する。

クミコは、両親と兄と四大家族の中で孤立していて、すべてを受け入れてくれるトオルに救いを求めて結婚した。

クミコが両親によって精神的苦痛を与えられて育ってきたのに対し、トオルは、母親が、トオルが大学に入った時に他界し、父親が再婚したことから、父親とのあいだがうまくいけなくなり、きょうだいもないことから、実家というようなものがない。代わりに母親の弟の叔父が経済的に援助してくれ、相談にのってくれる。その叔父は、東京の大学を卒業し、放送局に就職、ラジオのアナウンサーを十年続けたあと退職し、銀座でバーを始めた。その店が有名になり幾つかの飲食店を経営し、他に貸家や賃貸マンションを持ち、投資の配当などからも収入を得ている。四十代半ばになって、三、四歳年下の離婚経験のある女性と結婚した。叔父は、勤務先のないトオルにとっては、唯一信頼できる年上の男性である。

叔父は冷静で、客観的で、バランスの取れた人物で、大きな組織に属さず、人の評判によって動くのではなく、オーナーとして自分の才覚で店を経営する。甥に指図をしたり、生き方を押しついたりせず、自分の経験を語る。そうした叔父のアドバイスは、トオルの自我を目覚めさせ、個としての責任を意識させる。叔父は、クミコと別れることに疑問を投げかけ、トオルが自分自身を見つめる機会を与えた。叔父の存在は、無職のトオル

にも読者にも安心感を与える。

同様のことは、間宮徳太郎の出現にも言える。間宮徳太郎は、本田大石老人の遺品を届けるために、トオルの家に来てきた。間宮は昭和十二年に満州に送られて以来、十二年間大陸にいた。帰国した間宮は、妹と父が広島原爆の犠牲となり、ソ連との戦闘で戦死したと見做されて墓が作られ、漠然とではあったが結婚の約束をした女性は、すでに他の男と結婚していることを知る。間宮は、1945年8月のソ連軍侵攻の時、対戦車戦の最中に肩に重機関銃の弾丸を受け、一時的に失神したところをソ連軍戦車のキャタピラで左手を踏みつぶされ、ソ連軍の捕虜となり、チタの病院で手当てを受け、シベリアの収容所に送られ、1949年まで抑留されていたのである。

間宮は大陸で二つの大きな体験をしていた。一つは、外蒙古の砂漠にあった井戸に放り込まれ、深い井戸の底で見た啓示。一日に何十秒間だけ井戸の底まで差し込む日の光の記憶が、対極にある闇の深さを一層強く感じさせる。間宮は、何十秒間の光にのみ人生の真の意義を見だし、それ以外を抜け殻だと感じたのである。井戸の底で体験した暗闇は、皮剥ぎボリスの犠牲になった山本の記憶と重なり、間宮は、自分の人生を抜け殻とイメージしていった。もう一つは、シベリア抑留地で、皮剥ぎボリスに再会し、皮剥ぎボリスを殺そうとして、失敗したことである。ボリスを殺したという心境を次のように述べる。

もちろん彼一人を抹殺したところで、我々の置かれた状況が好転するという保証はありません。(略)しかし何があろうと、私はこの世界にボリスという人間の存在を許すわけにはいかなかったのです。ニコライの予言したとおり、

彼はまるで毒蛇のような存在でした。誰かが彼の首を掻き切らなくてはならないのです。(第3部34 p 501-502)

ボリスは元内務省秘密警察の少佐で、スターリン大粛清に加わり権力を握ったベリヤの部下として反革命勢力の弾圧をしていた男だったが、誤って共産党幹部の甥を殺してしまい、秘密警察が力を尽くして処刑を免れシベリアに送られたが、近いうちにベリヤが呼び戻す約束をしていたという。組織を後ろ盾に思いのまま人を操るボリスを、間宮は許すことができなかった。しかし間宮は殺害に失敗し、ボリスから「私は必要のない殺しはない」と言われ日本に戻された。最後まで人としての尊厳を汚されたのである。

間宮は、陸軍中尉であったが、トオルに語ることばにも、手紙にも、報国、忠君につながる内容はない。戦後、約六十年経っているが、間宮は、当時を語る時、ただの個人としての自己を語っているのである。砂漠に掘られた深い深い井戸の底で、また、極寒での人権を剥奪された環境の中で自己を掘り下げた経験、すなわち真の自分を語ったのである。

目前に敵のいる国境において、捕虜になって、真の自分を見つめることができるものかどうか。しかし、間宮の語りには、読者を間宮の行動に引き込むものがある。戦場であっても、究極の対峙においては自我と自我とのせめぎ合いだという、間宮の実感が伝わってくる。

間宮は、ほとんど誰にも語ることもなかった戦争体験をトオルに語った。間宮のボリスに対する憎悪は、トオルとクミコのノボルに対する憎悪に似ている。間宮の語りは読者にとって、トオルのノボル憎悪を自然に感じさせる効力をもつ。すでに、ノボルの悪が動かしがたいものになる証言は、

加納クレタによっても語られている。

加納クレタの姉マルタは霊能力者で、占いや予言を頼りにしている綿谷家と関わりを持っている。綿谷家のお嬢さんであったクミコの頼み、猫探しもする。綿谷家の揉め事などにも力を発揮し、クミコを取り戻そうとするトオルと、拒否するノボルとの間に立つ。妹のクレタを愛し、クレタは姉を頼る良い関係の姉妹である。クレタは、姉の使いでトオルの家の水をもらいに来て、トオルに非常に個人的な話し、幼い時から今にいたるまで自らが負わなければならなかった災難の数々を語る。その中に綿谷ノボルと性的に関わり、精神的に汚されたという話しがあるのだ。妹がノボルに汚されたということを、マルタは既に知っていて、猫探しの件で会った際、トオルに話している。トオルは、ノボルの話しをクレタから聞きたかったのである。非常に具体的なクレタの話は、ノボルが、自分より下だと思ふ者の人格を損なう非道さを明らかにする。

トオルは、マルタの仲介によりクミコの件でノボルと会った時、次のようにノボルから言われた。

どうしてクミコが君と一緒にになったのか、私には今でもよく理解できない。あるいは彼女は君が頭の中に抱えているそのゴミとか石ころみたいなものを面白いと思ったのかもしれない。でも結局のところゴミはゴミだし、石ころは石ころだ。(第2部3 p 65)

ノボルの、トオルの人格を貶めることばに、トオルは根拠のない反論しできない。しかし、ノボルが帰って後マルタは「あなた御自身の力で、御自身の手で勝ち取るしかないことなのです」と言う。組織を頼りにせず、自分で勝ち取るという考えは、マルタも、ねじまき鳥の声を聴く側だとい

うことである。

トオルはノボルがクラゲを例に「このような理念なき政治はやがてこの国を、潮の流れのままに揺られ、運ばれる巨大なクラゲのような存在に変えてしまうことだろう」と語る週刊誌の記事を読まずにいられず読んだ時、クミコはクラゲが好きだったことを思い出し、クラゲが国の墮落した姿のイメージとして使われたことに憤慨する。「潮の流れのままにただふらふらと揺られているわけではない。決してクラゲの弁護をするわけではないけれど、彼らにも彼らなりの生命的な意思というものはあるのだ。(略)正確なメタファーを使ってクラゲを侮辱するのは間違ったことだ。(第2部15 p 335-336)「マルタにトオルは、「野生の国」「叩かれたら叩きかえす」と言い、マルタは「そういうことです」「そのとおりです」と返した。

### 3 増殖する憎悪

エリートにならないければ、この国で生きている意味などほとんど何も無い。ただひきうす中でゆっくりとつぶされるだけという、綿谷家の家訓を身に呈したノボルの存在を憎悪する者は増えていく。

マルタがノボルを憎悪しており、トオルの「叩きかえす」に同調したことから、クレタの行動を、次のようにも読むことができそうだ。

「意識の娼婦」だと称して、トオルの意識に入り込み、トオルにクレタの夢を見させる。一九六〇年代が舞台の映画『アメリカン・グラフィティ』に登場する女性のような、ジャクリン・ケネディのような髪型と化粧という出で立ちは、異常さを印象付け、どのような行動をしても誰からも怪しまれないことから、トオルに少し近づき、裸体でトオルのベッドに潜り込み、トオルを誘惑して、ギリシヤへと誘う。

クレタはクミコの洋服がぴったりと合い、クレタの裸の背中、クミコによく似ているとトオルは感じている。クレタがノボルに汚されたことを話す時のクレタの中に、ノボルは彼女の向こうにあるものを見ていて、自分自身が半透明になったように感じたときあり、ノボルもまた、クレタの向こうにクミコを見ていたと思われる。ノボルは、早逝したクミコの姉に執着しており、成人となつて、クミコをその代わりとして傍に置きたいと欲望しているという。

クレタは、クミコ探しの決断がつかないトオルを誘惑するのだが、その背景には、ノボルを代表とする綿谷家に対する憎悪がある。誘惑はマルタとも相談づくにちがいない。マルタは綿谷家と近くノボルとの接点もあつたが、クレタがノボルに汚され綿谷家を憎悪しているはずだ。ちょうどクミコがトオルを裏切る行為によって実家に身を寄せたと見たマルタとクレタは、トオルを奪い去り、綿谷家に一矢を報いようと考えたとしても無理な話ではない。トオルは、クミコをあきらめてクレタと新しい生活を始めるかどうかの岐路に立った時、誘われるまま浪に乗ろうとする。トオルのこの決断は、妻の浮気を許すことができない心情を暗示しているようでもある。トオルは立腹せず怒りの言葉もないが、クレタの誘いに簡単に乗ってしまうところに、クミコの行為に対する諦めも見てとれる。マルタとクレタは、感情的にならない。すでに幼少の頃より、感情を表に出さない訓練ができていたのだ。二人の両親は、マルタに特異な霊的能力があることを封じ込め、クレタの体を感じる原因不明の痛みを無視して、抑圧した。マルタとクレタは、自身の欲望を知られないように、自からの目的を行使しようとするが見ることが出来る。

トオルを、牛河という男が、こんな言い方でほめる。

「いやね、ここだけの話ですが、わたしは実は岡田さんにはけっこう感心しているんです」と牛河は言った。「本当ですよ。(略) 岡田さんはもともとどう見ても普通の人です。もっとあからさまに言えば取柄がない、というかね。(略) わたしはエリートとか役人とか、そういうの嫌いです。言っちゃ悪いけど大嫌いです。表からするっと社会に入って、綺麗な奥さんをもらってぬくぬくしているような連中がね。岡田さんみたく自分一人の甲斐性でやってる人が好きです、わたしは」(第3部17 p.245-246)

牛河は、ノボルの伯父の元で仕事をし、伯父の死後、衆議院議員となつたノボルに地盤ごと引き継がれ、トオルの身边を調査していた。牛河は最後にトオルと会った時、ノボルはとんでもない下品な欲望の持ち主で自分より下種だと見ていると語る。すでに、ノボルの元を辞めた気軽さからの本心である。トオルが、「一人の甲斐性」で、大きな力を持ちつつあるノボルと戦っていることへのエールに近い気持から語ったものでもあっただろう。

牛河は、クミコについて次のような情報を漏らす。

あの綿谷っていう家にはもともとちよいとややこしい問題があります。(略) でもとにかくクミコさんは以前からそれを感じるか知るかして、あの家から出ていこうとしていた。そこに岡田さんが登場し、二人は愛し合い結婚し、末永く幸せに暮らすことになりました。(略) どっこいそうはいかない。綿谷先生はどういうわけか自分の手もとからクミコを手放したくなかった。(略) だんだん時間が経つにしたがってクミコさんの必要性がはっきりと出てきたんじゃないでしょうか。(略) その綱引きの過程でかつてクミコさんの中にあった何かが損われてしまったんじゃないか、(略) 先生とクミコさん

とのあいだに何があったのか、何があるのか、わたしにはただただわからな  
いんです。こればかりは想像もつかないんです。ただね、そこには何かしら  
ゆがんだものが存在しているように、わたしには思えるんです。それから綿  
谷先生と離婚した奥さんとのあいだには正常な性生活がまったくなかったと  
いうことです(略)(第3部31 p.436-438)

この牛河の想像からは、クミコがトオルの前に姿を見せないのは、ノボル  
に関係があることがわかる。綿谷家が幼いクミコを、それぞれの都合でや  
り取りしたこととのつながりが見える。クミコには姉がいて、クミコより  
外見も内面も能力も勝っていたという家族の了解事項もかかっていると思  
える。クミコが、家族の中での居場所がないと感じていたように、姉より  
劣っているとのレッテルを貼って、両親もノボルもクミコをいてもいな  
くてもよいと考えていた。しかし、結婚に失敗したノボルは、妹を傍に置  
いておきたくなつたと、牛河の話から想定することができよう。クミコは、  
トオルほどノボルを憎んでいなかった。時々電話で話しもある。ノボルが  
選挙に出ることも聞いていた。クミコは兄の言うことを信じていたし、き  
ょうだいとして親しみを持っていたから、「兄貴」とも呼んだし、トオル  
と拾った猫も「ワタヤ・ノボル」と呼んでいた。議員となったノボルは、  
トオルのような三十代で無職の親族がいることも、自身の評判の支障とな  
るため、妹を取り返そうとしたとも考えられる。牛河の想像のように、欲  
望の対象として所有したかったとも考えられる。クミコはノボルの欲望に  
気づいていたので、トオルの元を去ったが、綿谷家で暮らすことは拒否し  
たのであろう。

牛河がねじまき鳥の声を聞いているかどうか不明だが、利害関係のなく

なったトオルに調査情報を漏らすのは、トオルへの好意からである。やはりねじまき鳥の声を聞いて行動する側なのである。彼らの共通点は、「普通の人」であることだ。

トオル同様ノボルに憎しみを抱く者が現れ、物語が進むほどに、トオルの憎悪は、トオルだけの思い込みではないと読者は感じてくる。そして、赤坂ナツメグが登場する。

ナツメグは、トオルが顔に父親と同じ右の頬に青いアザのあることから親近感を持ち、ナツメグのセラピストとしての仕事にトオルが役立つこともあり、友好関係を深める。ナツメグの父親は、シベリアの炭鉱で事故に会い死亡した。ナツメグは母親と終戦直前に新京を脱出したのだが、動物園の獣医であった父親だけ新京に残った。ナツメグが語るナツメグが去った後の父親の体験談は、ナツメグが作り出した物語のようでもある。

終戦直前に、自分の意思を封じられた獣医、日本の関東軍の中尉、伍長、若い兵士たちが、上からの命令のままに動物を殺し、中国人を殺す話してある。そこでは、組織によってがんじがらめになった者たちの諦めが語られる。ナツメグの息子のシナモンは、ねじまき鳥の声を幼い頃に聴いているが、夢と現実の境界を越えて魂が浮遊する体験をし、殺人の現場に遭遇するなどにより言葉を話すことができなくなっている。

戦時中の満州で組織に縛られ運命と諦めるしかなかった祖父にまつわる話だが、シナモンの心を深く傷つけたと考えることができよう。話すことなく、才能の芽えを見せるシナモンの存在は、地位と権力によって、抵抗できない者をすりつぶしていく悪に、無言の抵抗をする姿である。

このようにトオルが憎悪を向けるノボルは、戦時中満州での、戦後シベリアでの、人の尊厳を犯す者の存在にも重なっていくのである。

ねじまき鳥の声を聞く者と、組織を背景に世界のねじを巻き自分の権力を満たそうとする者とのクロニクルは、自我の欲望が、他者の自我を踏みにじる様のクロニクルでもある。

#### 4 叩きかえしたクミコ

トオルは、間宮の話しに導かれて自宅の庭の塀を乗り越え、入り口も出口もない路地の奥にある元宮脇家の井戸に入る。路地に立ち入った契機は、クミコが猫探しに行くように指示したからであり、そのため井戸の存在を知ることになった。その井戸の底で、クミコとつながるのである。

トオルは、自分の感情に動かされることなく、クミコや間宮や叔父の示唆を素直に実行している。トオルが自分の考えを主張したのは、仕事を辞める時とノボルへの憎悪を表現する時だけで、退職後は、読書を楽しむに淡々と家事をこなしてきた。それこそが、ねじまき鳥の声の世界に生きる者の日々である。

トオルとクミコが離婚を考えた原因には、綿谷家の問題が関与していることがしだいに明らかになってくる。一度は、クミコを諦めようとしたトオルであったが、プールに浮かんで井戸の底にいた感覚になった時、クミコが自分を求めていることに気づいた。そこから、トオルのクミコ探しは始まる。

第3部は、「鳥刺し男編」という小題が付けられている。鳥刺し男とは、モーツァルトの歌劇『魔笛』に登場するパパゲーノのことだろう。第1部が歌劇『泥棒かささぎ』で始まり、最終の幕は『魔笛』と言うわけである。『魔笛』は、大蛇や夜の女王が登場し、王子タミーノとパパゲーノが試練を与えられ、魔法の力を借りて恋人にめぐり会う物語である。しかしトオ



ルは、クミコにめぐり会うことになるが、『魔笛』のように「めでたし、めでたし」というわけにはいかない。『魔笛』は、男性が心を引かれた女性を捜し当てる物語で、ディズニーのアニメーション、「白雪姫」「シンデレラ」「眠れる森の美女」が、最後には王子様が現れて、お姫様を救い出してめでたく結婚する物語とよく似ている。ディズニーのプリンセスものは、ジェンダーの教材として使われ、王子様を待っているだけの女性、結婚が終着点の人生という点に批判がある。

クミコは、脳溢血で倒れて眠っている兄のノボルの生命維持装置を抜く。トオルに話すべきことを話す勇気がなく、ものごとはそれほどひどいことにはならないだろうと、クミコが何もせずただあてのない期待をしていたため、悪夢のような出来事へと進展してしまった。「すべては私の責任なのです」(第3部40 p586)とクミコは言う。このクミコの責任感こそ、ディズニーのプリンセスたちに欠如していたものである。白雪姫も眠れる森の美女も、眠ったまま王子が魔女を退治するのを待っていて、王子様にすべて終わったよと言って目覚めさせてもらうから、プリンセスは辛い、苦しい場面に遭遇しないのである。しかしクミコは、自分で退治した。自立した個人として行動したのである。で、トオルはというと、ノボルへの憎悪を周囲から賛同してもらい、夢の中でノボルと戦うのみで、現実にはほとんど傷つかないのであった。クミコの言う悪夢が始まる前と同様、クミコの帰りをひたすら待つだけである。

## 5 トオルの友人として残った者 メイ

『ねじまき鳥クロニクル』では、トオルがクミコを愛していること、帰って来るのを待っていることを知った、クミコが行動を起こす。すでに、

トオルのノボルに対する憎悪を正当化するように語りかけてきた人々は皆去り、トオルとクミコがノボルと対峙している。トオルはノボルが「何かしら特別な力を持っていた。そしてその力に感応しやすい人間を見つけたし、そこにある何かを外に引きずりだす力を持っていた」(第3部36 p539)と、単にノボルがシステム(組織・体制)を利用し、人を踏みつけにしていただけではなく、さらに人の尊厳を汚す特別な力を持っていたと確信している。『ねじまき鳥クロニクル』では、人の意識に入り込むクレタ、時空を超えて過去にタイムスリップできるナツメグ、そして壁抜けによってクミコの居る部屋へ出かけるトオルと、特殊な力を持っている者が登場する。それは、意識しない心の作用なのである。憎悪にしても、怒りにしても、認識とは別に心の中に蓄積していくものを表現する村上の手法がここにも見られる。

それぞれの体験は、それぞれの心の中に意味を持って記憶され、心の奥にわだかまる。わだかまっているものは、あるとき噴出する。自分自身も意識しない時に、まるで針にさされて「痛い」と叫ぶように、自らの内面から突然噴出する。怒りである。あるときは言語で、あるときは行為で噴出するのである。それは、ワイトゲンシュタインの「感覚表出」<sup>(8)</sup>の考え方と同じであろう。

『ねじまき鳥クロニクル』第1部と第2部では、岡田トオルは自我を露わにしない男として語り始められるが、しだいに、憎悪と怒りが自分の心の奥底にわだかまっていることを認めざるを得なくなる。表出する憎悪の矛盾、憎悪の本質を語るクレタのことばがある。

「憎しみというのは長くのびた暗い影のようなものです。それがどこからのび

てくるのかは、おおかたの場合、本人にもわからないのです。それは両刃の剣です。相手を切るのと同時に自分をも切ります。相手を激しく切るものは、自分をも激しく切ります。命取りになる場合もあります。でも捨てようとして簡単に捨てられるものではないのです。岡田様もお気をつけになってください。それは本当に危険なのです。一度心に根づいた憎しみを振り落とすのは至難の業です」(第2部14 p.309)

自分がねじを巻き世界を動かそうとする者に人格を汚されたねじまき鳥の声を聞く者が、理屈ではなく心の底から噴出する憎しみに突き動かされて、何倍もの暴力をふるい、意趣返しをする。『ねじまき鳥クロニクル』には、そうした心の様子がしくまれているのである。笠原メイは、理由もなく、自分の中に大きくなっていくものについて、

太陽の下では私のからだの中にちゃんと収まっていたものが、その暗闇の中では特別な養分を吸い込んだみたいにな、おそろしい速さで成長しはじめるのよ。私はそれを何とか抑えようとしたわ。でも抑えることができなかった。そして私はどうしようもなく怖くなったの。そんなに怖くなったのは生まれて初めてのことだった。私という人間は私の中にあつたあの白いぐしゃぐしゃとした脂肪のかたまりみたいなものに乗っ取られていこうとしているのよ。それは私を食ろうとしているの。(第2部16 p.353)

と、理性では抑えきれないものが自分の中にあると気づいている。それは突然噴出する。メイは、オートバイを運転する男の子の目をふさぎ、オートバイは事故を起こし男の子は死亡した。また、トオルが入っている井戸から縄梯子をはずし蓋を閉めてしまった。その原因について、自分の中に

ある、自分を揺さぶるものの感じを人に伝えたいのだけれど誰もわかってくれない。

聞いているふりはしているけれど、本当は何も聞いてない。だから私はときどきひどく苛々するし、それで無茶苦茶なことをしちゃうの(第2部16 p.356)

自分を揺さぶるものの存在に気づいたメイは、そうしたものが自分の中にある限り、本来の自分というものがあ、それは、かなり堅固なものと感じている。

六年前に結婚したとき、僕らは二人でまったく新しい世界を作ろうとしていたんだ。ちょうど何も無い空き地に新しい家を建てるみたいにな。僕らには自分たちが何を求めているかというはっきりとしたイメージがあった。べつに立派な家じゃなくてもいい。(略)僕はそれまでに存在した僕自身というものから抜け出したかった。クミコにとってもそれは同じだった。僕らはその新しい世界で、本来の自分に相応しい自分自身というものを手に入れようとしたんだ。僕らはそこでもっとうまく、もっと自分自身にぴったりとした生き方ができると思っていたんだ(第2部10 p.198-199)

それを聞いた笠原メイは、こう言う。

あなたが今言ったようなことは誰にもできないんじゃないかな。『さあこれから新しい世界を作ろう』とか『さあこれから新しい自分を作ろう』とかいうようなことはね。私はそう思うな。自分ではうまくやれた、別の自分になれたと思っても、そのうわべの下にはもとのあなたがちゃんというし、何かあればそれが『こんにちば』って顔を出すのよ。あなたにはそれがわかっ

ていないんじゃない。あなたはよ、そで作られたものなのよ。(略)だからきっとあなたは今、そのことで仕返しされているのよ。いろんなものから。たとえばあなたが捨てちゃおうとした世界から、たとえばあなたが捨てちゃおうと思っただけあなた自身から。(第2部10 p.199-200)

この物語における人間のクロニクルは、時代によって政治、経済体制が変わり、国の基盤である憲法が変わっても、笠原メイの言う人間の中にある「ぐしゃぐしゃしたもの」で成り立っている。つまりどのような生き方をする者であっても、人は、自分の欲望によって行動しているという考えがあるのである。

川村湊は、『ねじまき鳥クロニクル』について「戦無派」と言われる村上春樹が満州を舞台とした理由について考えている。犯罪行為だという前提のもとに、満州への日本侵略は、「新天地、新国家を夢見た、ただ一度の実験だったことも確か」「新しい国」への憧憬が、満洲国へと向かう人々の心の中に秘められていた」と傀儡帝国に「王道楽土」を夢見た当時の日本人を読み取ろうとし、そうした植民地における別の世界への憧れは、「一歩間違うととんでもない事態を引き起こす」と、オウムを「満洲帝国」のパロディだと考える。「こうした悪夢が、半世紀後に繰り返されるとは誰にも予想外のことだ」「どうして人は、新しい世界、新しい国家を求めたのだろうか」と、人間が夢を見ることに思いをはせる。そして導き出されたのは、「時代閉塞」であった。「戦後五十年の今になり、「満蒙開拓団」を問い直すのは、私たちの中に再び現状が閉塞されているという思いが浮かび、新天地、新世界を希求する気持ちが渦巻いていると思われるからだ。文学はそうした不安な社会のカナリアなのである。」として、そこに「閉

塞感」からの解放の模索があると見ている。しかし、作品に、トオルとクミコの物語を含めて語られるいくつもの物語をたどれば、「閉塞感」を訴えているように思われる。自分で世界のねじを巻こうとする者が、ねじまき鳥の声を聞きながら自分の道を一步一步探して行こうとする者を、石ころやゴミのように排除し、また利用しようとする暴力が語られている。ノモンハンでの戦争も、日本人が共に夢を追っているようには語られていない。参謀本部、また関東軍の上層部は、下士官に対し、まったく敵の情報や情勢を知らせることなく、任務の目的も知らせることなく、一言の命令のみで国境の前線に行かせるのだ。危険を回避し任務を遂行せず戻れば、敵前逃亡として懲罰を課す。「王道楽土」は、他国を奪う卑劣な現実を知らない者が踊らされるスローガンにすぎない。この物語における満州で、本田も間宮も、日本の夢のために任務を遂行しようとする義務を語ってはいない。「敵前逃亡」「任務放棄」による懲罰を恐れ、間宮は、本部に戻るより前線で参戦し、命の始末をすることを望んでいる。そして本田は「死んでこそ、浮かぶ瀬もあれ、ノモンハン」を呪文のように唱え、若い者に、石ころのように死ぬことを強要されたノモンハン体験を伝えようとするのだ。

『ねじまき鳥クロニクル』には、人間の欲望の噴出、それが組織を笠に着ていけば一層、地位の低い者を見下す形で噴出する有り様が、回想にも現実にも描かれ、読者はこのクロニクルの連関を察知できるのである。

『ねじまき鳥クロニクル』で、戦時中満州において日本人が無意味な殺戮を行い、中国の人を銃殺、撲殺し著しく汚す場面を具体的に描写している。また、シベリアでは、ボリスがスターリンにつながる残虐者であることを語る。さらに綿谷ノボルの、自分のみが一番であるために必要なカリ

スマ性を発揮し日本の中枢に入り込んでいく様を語る。しかし物語は大きな機関、たとえば日本陸軍、スターリン体制、日本の政党などに言及していない。政治批判もなく、社会批判もない。語られているのは、一人ひとりの心の中に潜む「ぐしゃぐしゃ」なるもの、汚された自分の人格を抱え持つ人が心の中で徐々に育てていく憎悪である。組織に属してもなお、現場で行動するのは個なのだという思想がそこにある。

ポール・トゥルニエ『暴力と人間』<sup>(10)</sup>は、神の恩寵こそが人間の不正、攻撃性という恐ろしい宿命を打ち破るという結論になっているのだが、神の恩寵を希求するのは、あらゆる人間に攻撃性を見たからである。トゥルニエは、暴力が多義的なもので、非難されるかと思えば、ジャンヌ・ダルクをヒロインとするように、称賛されることもある。それを評価する人がどちらの陣営に属するかによって決まることについてさまざまな事例や、思想から論究し、ハッカー<sup>(11)</sup>が『現代における攻撃と暴力』で暴力を良い悪いと区別する客観的基準を追求していることに示唆を受けた。「何が正しく有意義、かつ必要な暴力なのか、何が有害で犯罪的暴力なのかというところ」に問題があったとした。そして人間の攻撃性は生命そのもののあらわれだ。「生命本来の溢れる力、生命に不可欠の力、生命を特徴づける力、益にもなり害にもなるあらゆる可能性を秘めた力なのであって、それなくしては生命が存続し得ない」とし、フロイトも「攻撃性は破壊しざることのできない人間本性の特性である（『文化への不満』）」と言っていることを引いている。さらに心理学者の、攻撃性を「フラストレーションに対する反射衝動」だという、攻撃性が本能ではないという見解も紹介するが、「人生においてわれわれは自らを防衛しなければならない。強くならなければならない。相手を踏みにじり、破壊するためではないにしても、個人とし

て認められ、人から一目置かれるようになるためには断固たるところを見せなければならない」として、一個の人間として認められることが、精神を病んだ患者も自己主張をするように、世界中が忙しすぎて大衆に埋もれてしまう傾向にある現代において、若者が反動行為にでるのも一個の人間として認められないこちらに対する不満が原因になっているのだと考える。カントが「道徳の良心は命令的性格を持っている」と言うのは、デカルトが「良識こそすべての人に最も一般的に広がっている徳である」と言うことと同様、「定言的命令が最も普遍的なものと考えたところに誤りをおかしていると思う」と、人間が道徳の良心によって自立する存在であることを否定する。攻撃性は、人間の理性ではないところから湧き出るという思想にいたり、「神の恩寵なくしては」の結論が導かれている。

『ねじまき鳥クロニクル』は、こうした考え方と接点があるのではないだろうか。

エドワード・W・サイードは『知識人とは何か』<sup>(12)</sup>で、知識人が、集団思想から一歩退いた反対者でありつづけることの意義を批判的に次のように述べている。

知識人にはどんな場合にも、ふたつの選択しかない。すなわち、弱者の側、満身に代弁<sup>レアリゼーション</sup>表象されていない側、忘れ去られたり黙殺された側につくか、あるいは、大きな権力をもつ側につくか。(略) 集団的判断や集団的行動に短絡するときに無視されるか黙殺されがちなことを、いま一度記憶に蘇らせるべきだということである。集団や国民的アイデンティティをめぐるコンセンサスに関して、知識人がなすべきは、集団とは、自然なものでも神があたえたもうたものでもなく、構築され、造型され、ときには捏造されたものであ

り、その背後には闘争と征服の歴史が存在するということを、必要とあらばその歴史を表象しつつしめすことなのだ。(平凡社ライブラリー p.68-69)

集団を見極めることが知識人のなすべきことだと言っており、組織を利用し、大きな権力について、弱者を踏みこむのは、知識人のすべきことではないとの主張である。この主張に照らせば、ノボルは知識人を装っているだけ、トオルが感じた中身の空虚な存在である。そして、ノボルの背後には、日本の関東軍の闘争と征服の歴史があるのだ。さらにサイドのジュリアン・バンダからの次の引用も、ノボルの似非知識人ぶりを語っている。

知識人が真の知識人といえるのは、形而上的で高尚な理念に衝き動かされつつ、公正無私な、真実と正義の原則にのっとって、腐敗を糾弾し、弱きを助け、欠陥のある抑圧的な権威にいどみかかるときなのだ。(前出 p.30)

『知識人とは何か』は、1993年に行われた講演での言説であり、『ねじまき鳥クロニクル』の刊行とほぼ同時期である。知識人に対する疑念と期待について、考えなければならぬ時期にあたっていたとも言えよう。

『ねじまき鳥クロニクル』では、世界のねじを巻こうとする者が、高い壁を築き、ねじまき鳥の声を聴いて生活しようとする者を拒む。登場人物が並列に並び、知識人による暴力に対する憎悪をテーマとする構造を持っている。そして、いずれが悪でいずれが善かについては、自分の欲望により他者の人間としての尊厳を汚す者が悪なのである。

## 注

### (1)

①『ねじまき鳥クロニクル』書誌

①『ねじまき鳥と火曜日』(『新潮』1986年1月号 『パン屋再襲撃』1986年4月10日 文藝春秋に収録) 第1部1章と2章に当たる。猫の名前はワタナベ・ノボル、その他単行本との異同あり。

②『加納クレタ』(『TVピープル』(1990年1月25日 文藝春秋 1993年5月8日 文春文庫)

③『ねじまき鳥クロニクル第一部 泥棒かささぎ編』(『新潮』1992年10月号-1993年8月号)

④『ねじまき鳥クロニクル第一部 泥棒かささぎ編』(1994年4月12日火曜日 新潮社)

⑤『ねじまき鳥クロニクル第二部 予言する鳥編』(1994年4月12日火曜日 新潮社 書き下ろし)

⑥『ねじまき鳥クロニクル第三部(鳥刺し男編)』より「動物園襲撃(あるいは要領の悪い虐殺)」(『新潮』1994年12月号) 第3部10章に当たる。単行本との異同あり。

⑦『ねじまき鳥クロニクル第三部 鳥刺し男編』(1995年8月25日金曜日 新潮社)

⑧Murakami, Haruki. *The Wind-Up Bird Chronicle* (Trans.Jay Rubin New York: Alfred A. Knopf, 1997. 611 pages.)

『ねじまき鳥クロニクル』は、滞米中に執筆された。

村上春樹は、1991年、アメリカのニュージャージー州プリンストン大学の客員研究員として招聘され、約二年半プリンストンに住む。さらに二年間マサチューセッツ州ケンブリッジに滞在する。プリンストン大学での資格は、最初の一年半は、ビジッティング・スカラー、その後ビジッティング・レクチャーとなり、大学院学生を対象とするセミナーを週ひとこ

マだけ持つ。テーマは「第三の新人」の作品。(参考文献 村上春樹「さらばプリンストン」『やがて哀しき外国語』1994年3月 文藝春秋)

『ねじまき鳥クロニクル』に関して次の発言がある。

「ねじまき鳥と火曜日的女たち」(一九八六)という短編小説があった、あれを長編のために膨らませてみようというのが最初のアイデアです。それからプリンストンの図書館でなんとなくノモンハン事件に関する資料を見ているうちに、その二つが頭の中で結びついていった。「ねじまき鳥と火曜日的女たち」という短編ではもともと、漱石の『門』みたいな状況を書いてみたかったです。若い夫婦が生活する、路地の奥にひっそりある一軒家。そのへんから物語をつくっていった。(p24) / 水平的に流れる一人称の小説に、歴史を縦糸にして、垂直な流れを取り入れたいというのは前から考えていたことです。(p25 上段) / 『ねじまき鳥クロニクル』の出来に関してはそれなりの自信があったし、雑誌連載にして、続き物として読んでもらったらおもしろいんじゃないかと。そういうのを一度試してみたかったです。ただ、業界的には評判が分かれた。すごくいいという人と、こんなものぜんぜんだめだという人がいて。でも僕としては強い手ごたえがあったし、これまでにないオリジナルなことをやっているという確信があったから、何を言われてもまあいいやと開き直っていました。『ねじまき鳥』を書き終えたとき、これで自分がメイントラックに乗ったという実感がありました。これが僕のそもそもやりたかったラインなんだと。第一部と第二部をプリンストンで書いて、これでよしと思っただけで、本が出版されてしばらくすると、これではまだ書き足りないという気がして、マサチューセッツ州ケンブリッジに移って第三部を書き始めました。結局、九一年に始めて、完成まで四年近くかかったことになります。第三部まで書いてよかったと思います。一部

二部だけで終わっているよりも、世界が間違はなくひとつ大きくなったから。(p25下段～p26上段) / 堅い石の壁を抜けて、いまいる場所から別の空間に行ってしまうこと、また逆にノモンハンの暴力の風さえ、その壁を抜けてこちらに吹き込んでくるということ、隔てられているように見える世界も、実は隔てられてないんだということ、それがいちばん書きたかったことです。

どうして「壁抜け」ができたかというと、僕自身が井戸の底に潜っていたからです。深く潜って、自分をどこまでも普遍化していけば、場所とか時間を超えて、どこか別の場所に行けるんだという確信を得られた。つまり主人公「僕」が井戸の底に降りて石の壁を抜けるというのは、作者である僕自身が実際にその壁を抜けたことのアナロジーでもあるんです。空間と時間を移動する視線を獲得できたことは、小説家としてとても大きなことでした。(p26上段～中段) (特集村上春樹 ロングインタビュー『考える人』No.33 2010年夏号)

## (2)

『ダンス・ダンス・ダンス(上)』(講談社文庫 2006・4・7刷) p269  
にんにく、赤唐辛子、ハム、オリーブ・オイル、スパゲティの材料を使ったレシピが記されている。

## (3)

藤原歌劇団のロッシーニ作品上演記録を見ると、『泥棒かささぎ』は、2008年3月7・8・9日。東京文化会館で日本初演とある。(http://www.jof.or.jp/~userdata/rossiniarchive.pdf アクセス日 2013・9・18)

ミラノスカラ座にあっては、1817年5月世界初演、19世紀に6回上演しているだけ、20世紀には1977年まで上演されていない。(スカラ座におけるロッシーニ・オペラ上演記録 1812～1977年 http://societarossiana.jp/Rossini/Scala.pdf アクセス日 2013・9・28)

## (4)

『泥棒かささぎ』の話の概略は次のようである。  
舞台はイタリアのとある田舎。ファブリッツィオ・ヴィングラディート

の息子ジャンネットが兵役から戻ったお祝いの日。ジャンネットの恋人ニネットが家に入ると、父親フェルナンドがいて、帰還許可を巡る一件で隊長と刃傷沙汰を引き起こしてしまい、軍法会議で死刑が宣告されているという。代官がやってきてニネットを口説くが、そこに召使いのジョルジョが警察からの至急の手紙を届けに来、代官がそれを読んでいる間に、父親は唯一の財産である銀の食器をニネットに渡し、それを換金して近くの栗の木の下に隠してくれと頼み、ニネットにつきまとう代官を追い出し、立ち去る。その間にカササギがスプーンを盗んでいく。ニネットは行商人のイザッコに父親の銀食器を売る。ピッポがなぜイザッコを家に入れたのかとたずねると、小間物を売ったとごまかす。

そこへファブリッツィオ、ルチーア夫妻が登場し、また銀食器がなくなったと騒ぎ立てる。代官が家庭内での窃盗事件は現在の法律では死刑だと言い、ニネットを疑り深く見つめる。フルネームを聞かれたニネットが「ニネット・ウィッラベッラ」と答えたので、代官は脱獄囚の娘だと見抜き、父親の逃亡資金が必要なので盗みをしたのだろうと決めつける。折悪しく、彼女は銀食器を売ったお金を持っており、その出所を答えることができない。ピッポが小間物を売って得たものだと取りなし、証人としてイザッコを呼び寄せるが、イザッコはF.Vのインシヤルツィオの銀食器だったと答える。ニネットの父親のインシヤルとファブリッツィオのインシヤルは同じF.V。ニネットは言い訳ができず、家庭内窃盗容疑で逮捕・連行される。ルチーアは一度疑ってみたものの、ニネットのような娘が盗みをするはずがないと考え直し、そこへ娘が現れないことに心配したフェルナンドが来て事情を知り驚く。フェルナンドは例え自分が死刑となっても娘を救うために出廷し、真相を話そうという。判事が現れニネットの罪状を読み上げて死刑を宣告する。そこへフェルナンドがやってきて娘を許してくれるよう事情を打ち明けるが証拠がないと取り合ってもらえず、ニネ

(5)

ットの死刑が執行されることになり、同時にフェルナンドも脱走罪で逮捕される。フェルナンドの友人エルネストが国王の恩赦を取り付け、彼を探しに来る。折り良く出会ったピッポにファブリッツィオの家の住所を聞き、家に向かう。ピッポはニネットに言われたとおり栗の木の下にお金を届け、広場で残りのお金を数えていると、そこに突然一羽のカササギが飛んできて銀貨をくわえて逃げる。ピッポはカササギを追っていく。ピッポが鐘楼の中にカササギが隠した銀食器を発見し、食器泥棒はカササギだと皆に伝える。ニネットは無罪となり、同時に、父フェルナンドもエルネストが届けてくれた恩赦状によって許される。そしてニネットはジャンネットと結婚する。(ウィキペディアに拠る)

社会の中の個人の自由のためのエルサレム賞(英語: Jerusalem Prize for the Freedom of the Individual in Society)は、エルサレム国際ブックフェアにて表彰される文学賞。通称エルサレム賞。村上春樹は、2009年2月15日授賞式でスピーチを行った。高くて固い壁とそれにぶつかって壊れる卵の比喩について、次のように語った。

「高く堅牢な壁と、そこにぶつかれば壊れてしまう卵があるなら、私は常に卵の側に立とう」ええ、どんなに壁が正しくとも、どんなに卵が間違っているとしても、私は卵の側に立ちます。何が正しく何が誤りかということは、誰か他の人に判断してもらいましょう。時間や歴史が証明してくれるかもしれませんが、いかなる理由があるにせよ、もし壁の側に立って書く小説家がいるとすれば、そんな作品にどれほどの価値があるでしょうか。この壁と卵の比喩の意味とは何でしょうか。それはごく単純で明らかです。爆撃機や戦車、ロケット弾、そして白リン弾は、高い壁です。卵は、押しつぶされ、熱に焼かれ、銃で撃たれた非武装の一般市民たちです。これがこの比喩の一つの意味であり、真実です。

しかし、これがすべてではありません。そこにはより深い意味が含まれています。こんなふうを考えてください。私たちはそれぞれ、多かれ少なかれ卵なのです。掛け替えのない大切な魂が、もろい殻に入られている卵——それが私たちなのです。私もそうですし、皆さんもそうです。そして私たちそれぞれが、程度の差はありますが、高くて堅牢な壁に直面しています。壁には名前があり、「ザ・システム（体制）」と呼ばれています。体制は本来、私たちを守るためにあるのですが、時に自ら生命を持ち、私たちを殺したり、他の誰かを冷酷に、効率よく、組織的に殺させたりします。私が小説を書く理由はたった一つ、個々の魂の尊厳を浮き彫りにし、そこに光を当てることです。

物語の目的とは、体制が私たちの魂をわなにかけ、卑しめることがないように、警報を発したり、体制に光を向けたりしておくことです。生と死の物語、愛の物語、読者を泣かせ、恐怖に震わせ、笑いこぼさせる物語。小説家の仕事は、そんな物語を作ることによって、個々の魂のかけがえのなさを明確にする努力を続けることだと信じています。私たちはそのために毎日毎日、まじめに作り話を作り続けているのです。『心をゆさぶる平和へのメッセージ』（2009・5 ゴマブックス）に

よる村上春樹のスピーチの和訳 p.45、47、49）

(6) 妻のクミコが電話でいくつかの話しを一方的にして電話を切った後「近所の木立からまるでねじでも巻くようなギイイイッという規則的な鳥の音が聞こえた。我々はその鳥を「ねじまき鳥」と呼んでいた。クミコがそう名づけたのだ。本当の名前は知らない。どんな姿をしているのかも知らない。でもいずれにせよねじまき鳥は毎日その近所の木立にやってきて、我々の属する静かな世界のねじを巻いた。」（第一部1 p.19）、加納クレタが、二十歳までの生い立ちを語り終わった時、「何か言った方がいいのかと思っただ、何を言えればいいのかわからなかったので黙っていた。遠くの方でね

じまき鳥が鳴くのが聞こえた。」（第一部8 p.199—200）

(7) ねじまき鳥がもし本当にいなくなってしまうのだとしたら（中略）世界のねじはだんだん緩んでいって、その精妙なシステムもやがては完全に動きを停めてしまうことになる。（第二部10 p.187—188）

(8) ウイトゲンシュタインは、『哲学探求』（ウイトゲンシュタイン全集8）藤本隆志訳 大修館書店 1976・7 初版 2010・9 16刷）の中で、「誰かが自分の内的体験——自分の感じ、気分など——を自分だけの用途のために書きつけたり、口に出したりできるような言語を考えることもできるのだろうか。」（二四三 p.177）「ことばはどのように感覚を指し示すのか。（略）子供がけがをして泣く。すると大人たちがその子に語りかけて、感嘆詞を教え、のちには文章を教える。（略）「すると、あなたは、〈痛み〉という語が本来泣き声の意味している、と言うのか。」——その反対である。痛みという語表現は泣き声にとって代っているのだから、それを記述しているのではないのである。」（二四四 p.177—178）と、自分だけの体験のための言語が可能か否かについて思いに至る。すなわち、子供が泣くのは、大人が指に針を刺し、つい「痛い！」と叫ぶ状態と同じである。大人はそばで見ている、今頭をぶつけたから泣いたのだとか、ころんで足を怪我したから泣いたのだとか、子供が泣く原因を見て、痛かったから泣いたのだらうと想像し、子供に「い・た・い！」という言葉を教え、そういうときは「痛い！」と叫ぶものだとこのことをわからせる。泣くと同時に「痛い！」と叫ぶことを教えるのであって、「今、頭をぶつけたから痛いのです」と記述しているわけではないと言う。内的経験を自分のためだけに口にする言語である。鬼界彰夫氏は、ウイトゲンシュタインの「手稿」（フォン・ライト番号（MS120）飯田隆編『ウイトゲンシュタイン読本』1995・10 法政大学出版局）から「私は痛い」という言葉は痛みの行動の一部になる。それゆえそれは誰かがこのように行動したと述べているのではない。そして同



様に、感覚のあらゆる表出は原始的な感覚表出と結びついているのである。」というカ所を引用し、「私は痛い」という発話は自分の状態の記述ではなく、表出なのである。それゆえ「私は痛い」という言葉は子供にとって泣くことと同じ役割を持っているのである。すなわち我々は「私は痛い」と言うことにより、自分に注目を集め、自分に問題があることを知らせ、できるならその改善を求めようとするのである。それゆえ我々は自分に敵意をもつ人間に「私は痛い」とは決して言わないのである。こうしたウィトゲンシュタインの新しい「痛み」概念の背後には、言語とは自然的な現象の人間の延長である、(略)」という考えが存在していると、内的体験の感覚表出こそ言語の始まりであることをウィトゲンシュタインが発見したことを論じている。

(9)

川村湊「ねじまき鳥・オウム・カナリア」(初出『南信州新聞』1995・7・11 所収『村上春樹をどう読むか』2006・12 作品社) 川村湊は、「ハルハ河に架かる橋——現代史としての物語」(『国文学』1995・3 追記を含めて所収前同)で、満州に関して村上春樹が引用した文献、その他関連文献と作品とを検証し、フィクション部分をあぶりだしている。第三部の刊行を待って書かれた「追記」では、間宮中尉が井戸に落ちるといふエピソードに重要なヒントとなった作品として、新美南吉「張紅倫」をあげ、その論証は納得できるものである。さらに第三部「動物園襲撃」に言及し、中国兵を銃殺し、首謀者をバットで殴り殺すという日本軍の中国人虐殺のエピソードを次に述べる。「いずれも、中国侵略に対する日本軍の残酷さや、その悲惨な結末について言及しており、戦中の出来事と戦後の岡田亨の体験とが反復して象徴的に重ねられているのである。／『羊をめぐる冒険』の『羊に憑かれた男』の系列として、悪役・綿谷ノボルの伯父が登場しており、石原莞爾の思想に共鳴する人物として設定されている(略)綿谷ノボルは、この伯父の後継者とされているから、彼には『羊をめ

ぐる冒険』における「羊男」鼠」の役割が重ねられていると考えることができる。つまり、戦中の出来事を原型として、戦後が存在するということになる。綿谷ノボルの「悪」は、戦中の日本軍の「悪」と重ねられるものであり、生き延びた「鼠」の後身といえるものだったのである」と結ぶ。「クロニクル」の内容が、繰り返される「悪」だと指摘されている。

(10)

『暴力と人間』(山口實訳 1980・2 ヨルダン社)

(11)

ハッカーは、『暴力と人間』に次のように紹介されている。「精神分析学者として人間精神を無意識の深層深く探求し、カリフォルニア大学で教鞭をとるかたわら、重要犯罪事件の法廷に専門家としての識見をかわれている人であるが、とくに女優シャロン・テイと数人の人たちが、チャールズ・マンソンに魅せられた狂信者の一団によって恐ろしい血の祭典で殺害された事件にも係った人である。」

(12)

『知識人とは何か Representations of the Intellectual』1993年のBBCのテレビ・ラジオのリース講演が翌年書籍となり、日本語訳(大橋洋一訳)は、平凡社より1995年5月に刊行(平凡社ライブラリー 1998・3)された。

テキスト・村上春樹著『ねじまき鳥クロニクル』第1部(平成九年十月発行 平成二十二年四月三十八刷改版 平成二十四年四月四十六刷)

村上春樹著『ねじまき鳥クロニクル』第2部(平成九年十月発行 平成二十二年四月三十五刷改版 平成二十四年四月四十二刷)

村上春樹著『ねじまき鳥クロニクル』第3部(平成九年十月発行 平成二十二年四月三十五刷改版 平成二十四年二月四十一刷)

すべて 新潮文庫

(おおた れいこ 日本語日本文学科・文化創造学科)